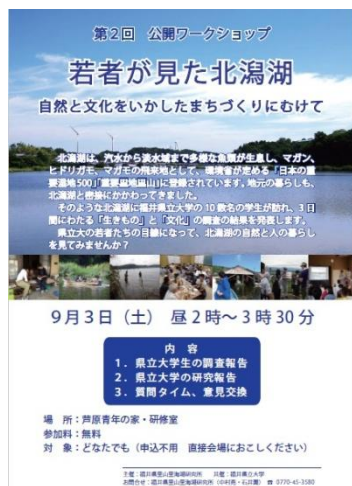


第2回公開ワークショップ「若者が見た北潟湖」



主催：福井県里山里海湖研究所
共催：福井県立大学
日時：平成28年9月3日(土) 14:00~15:30
場所：県立芦原青年の家 2階 和室

里山里海湖研究所の研究者が、福井県立大学の非常勤講師として担当している「地域社会とフィールドワークB(里の生物と文化の多様性)」の一環として、3日間にわたって行われた学生による北潟湖周辺地域でのフィールド調査の結果を地域住民の方々へ報告し、意見交換する公開ワークショップが行われました。

参加した11名の学生らは、生物調査班(動物班、植物班)と文化調査班の3班に分かれ、調査した内容について報告しました。報告の主な内容は次のとおり。

【県立大学生からの調査報告】

①生物調査班(植物)

今回初めて調査地となった「赤尾湿地」において作成した植生図を基に、多様な植物が優占している群落が見られたこと、絶滅の恐れがある植物であるコウホネ(県域準絶滅危惧*)やミゾハコベ(要注目*)などが見られたことが報告された。

また、湿地であるはずの場所にもかかわらず、比較的乾燥した土地を好むセイタカアワダチソウ(要注意外来生物)の群落も見られ、乾燥化が進んでいる状況についても報告された。

*改訂版 福井県の絶滅のおそれのある野生動植物 2016 より

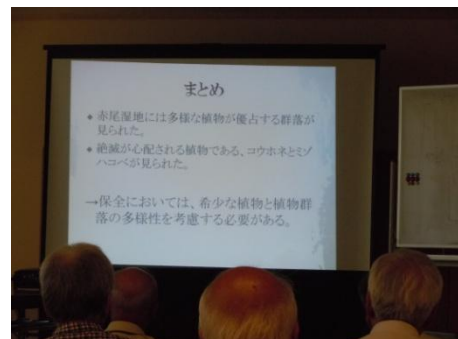


②生物調査班(動物)

北潟湖の湖畔や隣接する福良ヶ池、赤尾湿地において、どこにどのような生物がいるか、また、塩分濃度はどれくらいあるのかについての報告があった。

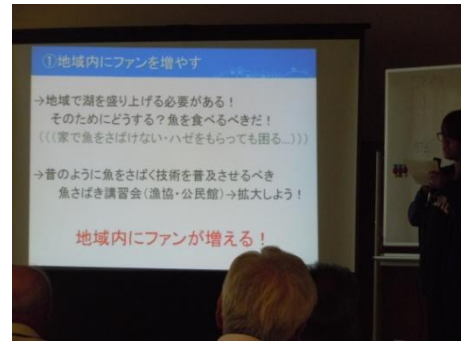
今回の調査では、数多くのモクズガニが捕獲されたことから、これを食材として利用してみてもどうかという提案もなされた。

また、昨年と比較しても湖のあらゆる場所の塩分濃度が上昇していることも併せて報告された。特に、湖最上流部の赤尾の湖畔でも、1.15%の値を示した。



③文化調査班

文化調査班からは、北潟湖における伝統的な漁法と食文化について報告がなされた。北潟湖で漁業に従事している方への聞き取り調査を行い、ウナギ漁や柴漬け漁といった漁法の現状と課題について報告した。それらを受けて、地域内外に北潟湖のファンを増やす必要があるのではないかという提案がなされた。具体的には、北潟湖で獲れる魚をもっと食べることで、そのためには昔のように魚をさばく技術を普及・浸透させる「魚のさばき方教室」など漁協と公民館へ取組みを拡大してはどうかというアイデアが発表された。



【県立大学の研究報告】

3つの班の発表の後、福井県立大学海洋資源生物学部の富永教授から、研究報告がありました。今回学生たちの報告の中でも何度も話題になった塩分濃度の上昇にともなう、特定外来生物ブルーギルが激減している現状について報告されました。ブルーギルは淡水に生息する魚類で、塩分濃度が0.6%を超えた段階でストレスを感じ、2%を超えると生存できないといった研究成果が発表されました。しかし、塩分濃度の上昇に伴い、他の在来の淡水魚も激減してしまっているという状況報告もありました。



【意見交換】

学生からの報告、富永教授からの報告を受けて、参加者のみなさんから次のような意見が出されました。

○昨年に引き続きの開催であるが、調査した内容について地図上にプロットするなど記録として残し、今後環境教育という視点に利用できるようにしてほしい。

○北潟公民館では、毎年1月にフナのさばき方講習会を実施している。学生のみなさんも是非参加してみてはどうか。



○塩分濃度が年々上昇しているということだが、このままいくと海水化してしまうのか？

⇒塩分濃度は季節によって上下動を繰り返している。夏場は高い値を示すが、冬場にはほぼ淡水の濃度まで下がる傾向がある。そのため、数年後に海水化してしまうということはないであろう。

短時間でしたが、実りあるワークショップとなりました。